第五十四回中央教化研究会議　基調講演

SDGsと仏教

枝木美香

枝木　おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました、枝木美香と申します。一点、プロフィールに一九九八年からアーユス仏教国際協力ネットワークの事務局長とありますが、入職したのが一九九八年で、事務局長に就任したのは二〇一一年でございます。なにぶんスタッフ数が二人から、多い時でも四人しかいない職場であるため、誰が事務局長で職員か分かりませんが、永らく活動させていただいております。

今日の中央教化研究会議のテーマは、「SDGsから仏教者を問い直す―ジェンダー平等を契機に新たな教師像を構築する―」ということで、SDGsとジェンダー平等が、大きなテーマとして挙がっています。私からは、ジェンダーという課題に特化する前に、そもそもSDGsとは何か、そしてそれに対して、仏教界もしくは仏教者の方々に対して期待したいことなどをお話します。仏教界のジェンダーの状況に関しては午後の第二部で西永先生より、リアルな体験も含めてお話いただくことになっておりますので、そちらで深めていただければと思います。

私は今、アーユス仏教国際協力ネットワークという、仏教者によって作られた国際協力の団体で働いています。そのご縁で、ジェンダーに関しては、「女性と仏教関東ネットワーク」というサークルに、知り合いから紹介されて参加するようになり、『女たちの如是我聞』という同人誌を毎年一冊出しております。いろいろな宗派の教師や寺族さ

ん、もしくは宗教とジェンダーについて研究している女性たちなど、様々な背景を持つ人が寄稿しているので、この活動を通じて、日本の各仏教教団でのジェンダー問題に触れる機会を持ってきています。

今日お話しするのは、アーユスでの経験に基づいたものが多いので、簡単にアーユスの紹介をします。日本で団体名に仏教を入れて活動しているＮＧＯは当会ぐらいではないかと思います。そういう点において稀有な団体で、日蓮宗の宗務院の皆様や、いろんなお寺の方々にも数多くご協力いただいて、今に至っております。本当にありがとうございます。

アーユスは一九九三年に超宗派の僧侶が集まって設立されました。設立者の大半が仏教僧侶であり、自分たちが現場に行って活動するのは難しいけれども、現場で活動しているＮＧＯをパートナーとして、多様な課題に取り組んできました。「世界にお布施！」を合い言葉に、紛争地での人道支援や、貧困問題、環境破壊などに取り組んでいる団体の活動を資金面で支えています。また資金面で支えるだけではなくて、現場で起きていることを私たちの問題として捉えられるよう研修の開催や、時にはスタディー・ツアーと称して現場に足を運ぶようなことも、これまでやってきました。

世界で起きている社会課題はたくさんありますが、その中でもどのような課題に注目し、協力する団体を選んでいるのかというと、特に光が当たっていないところに注目しています。ＮＧＯが取り組む課題の中には、注目されていないけれどとても重要なものや、政治的な理由などで置き去りにされている人権侵害など、社会的に光があたっていないものが多々あります。このような課題への取り組みは、往々にして資金も集めづらく、大きく展開することも難しい。だからこそ、アーユスはそれらの活動がより社会の中で知られていくことを期待して、光を当てています。それは、ＳＤＧｓが掲げている「誰一人取り残さない社会」に通じるものがあるのかもしれません。

さて、今日のテーマであるＳＤＧｓ「Sustainable Development Goals」について、改めて基本的なところから押

さえたいと思います。ＳＤＧｓは、二〇一五年に、国連総会で決議された目標です。

外務省と国連開発計画の定義をご紹介します。外務省は、「二〇三〇年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標」、国連開発計画ＵＮＤＰでは、「貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを目指す普遍的な行動を呼びかけているものだ」と説明しています。ＵＮＤＰの方が少し具体的ですね。世界中の貧困を終わらせたいとか、地球を守りたいということが謳われています。これらの定義から、私は、人間がみな等しく幸せになるための目標なのかなと理解しています。

「等しく」という言葉を入れたのは、誰か特定の人だけがお金持ちになるとか、貧困から抜け出すとか、ある一定の場所だけの環境が守られる、ということではなくて、みんなが同じように富にも、資源や権利などに平等にアクセスがあって、きちんとまっとうな人生を歩めることをめざしている目標だと理解しているからです。

ＳＤＧｓが二〇一五年に生まれた背景には、二〇〇〇年に出された「ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals）」、ＭＤＧｓというものがありました。二〇〇〇年頃は、開発途上国と呼ばれる国々の貧困問題があまりにも深刻で、途上国の貧困問題を解決しない限り不平等が世の中からなくならないだろうと、国連で採択された目標です。「Make Poverty History」貧困を過去のものにしていこう、と大きなスローガンが掲げられましたが、ＳＤＧｓほどは社会に浸透しませんでした。

もう二十年も前のことですが、「三秒に一人、世界の子どもが貧しさの故に死んでいる」というキャッチフレーズのもとに、時計の音がカチッ、カチッと鳴って、サッカーの中田英寿とか、Mr・Childrenの桜井和寿などが出て、「貧困問題に対してみんなで取り組んでいこう」と呼びかけていました。これはＭＤＧｓの流れから出てきたキャンペーンだったんです。

ＭＤＧｓには八つの目標があり、一番めに「極度の貧困と飢餓の撲滅」という、貧困問題の解決目標があげられて

いました。その次に、教育の必要性や、ジェンダー平等などの貧困問題を解決するための目標が打ち出されています。先進国は活動のお金を出す側で、つまり援助する側としてＭＤＧｓを進めました。

二〇一五年のＭＤＧｓの終了を前にＭＤＧｓの評価が行われたところ、一定程度の成果があがったことが認められました。一方で、課題も明らかになりました。その一例を挙げてみます。例えば極度の貧困、一日一・二五ＵＳドル未満で暮らす人は十九億人いたのが、八億三千六百万人と、半数以下に減少しました。また、五歳未満児のうち低体重の子どもの割合は、一九九〇年から二〇一五年の間にほぼ半減し、途上国の初等教育の純就学率は、八十％から九十一％に増加したというように、かなりの成果が出たことがわかります。

しかし、貧困の人が半数以下になったとはいえ、およそ半数の人は貧困のまま残っているわけです。その残された半数の人たちのうちの八十％は、南アジア、もしくはサハラ以南アフリカで暮らす、アフリカや南アジアで暮らしている方々でした。低体重の子どももほぼ半減したとはいえ、やはり南アジア、もしくはサハラ以南のアフリカで暮らす子どもたちが取り残されている。初等教育純就学率に関しても、まだ小学校に通っていない子どもたちが五千七百万人残されていて、そのうちの三千三百万人が、やはりサハラ以南のアフリカで暮らしている。また、残された子どもの半数以上を占める五十五％が女の子だったということが分かりました。

つまり、地域やジェンダーなどにかなりの偏りがあることが、結果から分かりました。極度の貧困に暮らす人が半減した大きな要因の一つには、二〇〇〇年から二〇一五年の間に、中国が経済的に大きく発展したことが挙げられています。中国は人口が多いので、中国の人たちの生活水準が上がると、それだけ地球全体の貧困が底上げされたように数字上には示されます。そのために、地域格差やジェンダー格差などをなくしていかないと、本当の意味での貧困の問題や社会課題は解決できないだろうということで、ＳＤＧｓには、「誰一人取り残さない（Leave No One Left Behind）」ということが大きく、強くうたわれるようになりました。

それらのことがＳＤＧｓの前文にも書かれています。長いので全部は読みませんが、「我々は、人類を貧困の恐怖及び欠乏の専制から解き放ち、地球を癒やし、安全にすることを決意している」。このように、ＭＤＧｓの時から引き継いでいる「貧困の恐怖や欠乏から私たちは解き放たないといけない」ということが、引き続きＳＤＧｓの中でも出ています。「この共同の旅路に乗り出すにあたり、誰一人取り残さないことを誓う」。ある特定の地域の人や、ある特定の属性を持った人たちだけではなく、等しく救っていく、誰一人取り残さないでいこうということがうたわれました。先ほどお話ししたように、この目標のターゲットでは、ミレニアム開発目標ＭＤＧｓを基にして、それが達成できなかったものを全うしていこうということを目指しています。

また、「これらは、すべての人々の人権を実現し、ジェンダー平等とすべての女性と女児の能力強化を達成することを目指す」とうたっているのも特徴的な点です。それだけ、ジェンダーの格差や、ジェンダー別にある能力開発の不平等性というものがＭＤＧｓの結果としても出ていたために、ＳＤＧｓでは、ジェンダー平等を実現しない限り、すべての人々の人権が実現されることはないということが、強く問われていることが分かると思います。先ほどアフリカなどの地域格差について触れましたが、地域格差ではなくてジェンダーの不平等さが、あえて前文にまでうたわれている。それがＳＤＧｓの特徴だと思っています。

これらを実現していくためには、「持続可能な開発の三側面、すなわち経済、社会、環境の三側面を調和させるものである」。これについては後でも触れますが、ただ単にその人の収入を増やすということだけに取り組んでも目標は達成されない、つまりその人の人権や置かれている環境など、多方面からこの問題を包括的に見ていかないと解決されないということです。それらからも、ＭＤＧｓの反省を基にＳＤＧｓは作られたということがわかるでしょう。

さらにもう少しＳＤＧｓの、特徴を見ていきます。「持続可能な開発（Sustainable Development Goals）」とわざわざうたっているということは、今の私たちの世界は持続不可能だということが前提にあるが故ではないでしょうか。

二〇三〇年までに、私たちが住んでいるこの世界を、持続可能なものに変革しようとめざしています。つまり、私たちの今の暮らしを変えようというのが、ＳＤＧｓの特徴です。

では、持続不可能性について見てみましょう。グローバル・フットプリント・ネットワークの報告によると、現在、世界全体で１・７個分の地球を必要とする暮らしが営まれていることがわかります。もし、世界全体の人がアメリカ人のライフスタイルで暮らした場合は、地球が五つ要るそうです。それだけ資源を使って暮らすことになるからです。世界全体の人が日本人と同じような暮らしをすると、地球が二・八個必要です。一方で、インド人のような生活を世界全体の人がしたら、地球一個分も要らないそうです。

ここからわかるのは、もし日本人のような暮らしをすることが貧しさの解放であり、アメリカ人のような暮らしをすることが豊かさだと定義をしてしまうと、とても持続可能な社会にはならないということなんです。それだけ地球の資源を使わないと、今の生活は成り立たないということが、この表からわかります。

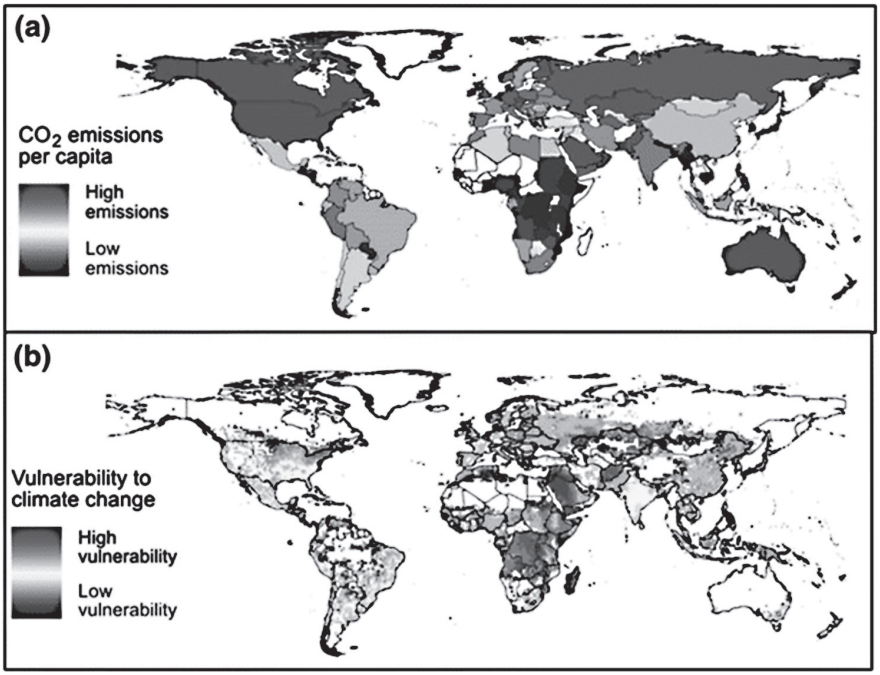
地球は何個必要?

もし世界人口がその国と同様の生活をしたら…

アメリカ	5.0
日本	2.8
中国	2.2
インド	0.7
世界	1.7

出典：グローバル・フットプリント・ネットワーク, NFA2018

地球温暖化の状況からも、同じことが言えます。今のままの暮らしを続けていくと、二酸化炭素の排出量はどんどん増えていき、二一〇〇年、私たちの次の次の世代ぐらいが大人になる頃、今よりも四・八度上昇してるかもしれないそうです。今年は異常なほどは高くはなりませんでしたが、仮に最近の東京の平均気温を三十五度としても、それが四十度ぐらいになって、大変な状況が予想されます。次ページにある上の地図は二酸化炭素排出量の分布で、下が



Geographical distribution showing (a) per capita emission of CO_2 and (b) vulnerability to climate change throughout the world (Adopted from Samson et al. 2011)

気候変動に弱い所の分布を示しています。上では、色の濃い所がこれまでの蓄積も含めて、二酸化炭素を多く排出してきた国です。下の色の濃い所は、気候変動が起きたときに、それに対して脆弱な国を指しています。これを見ると、二酸化炭素を排出してきた国々よりも、排出してない国の方が負の影響を受けやすいことが分かります。つまり、先進国が自分たちのライフスタイルや、経済行動を変えない限り、この世界は持続可能にはならないことを、この地図が示しています。

社会を持続可能にするためには、経済的なことだけでなく、環境が危機的に変化していることを忘れてはならず、そして、社会の中の不平等性、つまり女性をはじめとして恩恵を受けていない人たちがいることにきちんと目を配る必要があります。以前のＭＤＧｓの時には、途上国の問題に対して先進国がお金を出す役割でしたが、今は違います。先進国も変わらないとい

けません。お金を出すだけではなくて、私たちの生活そのものも変えていかなければならない。生産と消費、自然環境やエネルギーのことも対象にしながら、考えていかなければいけません。

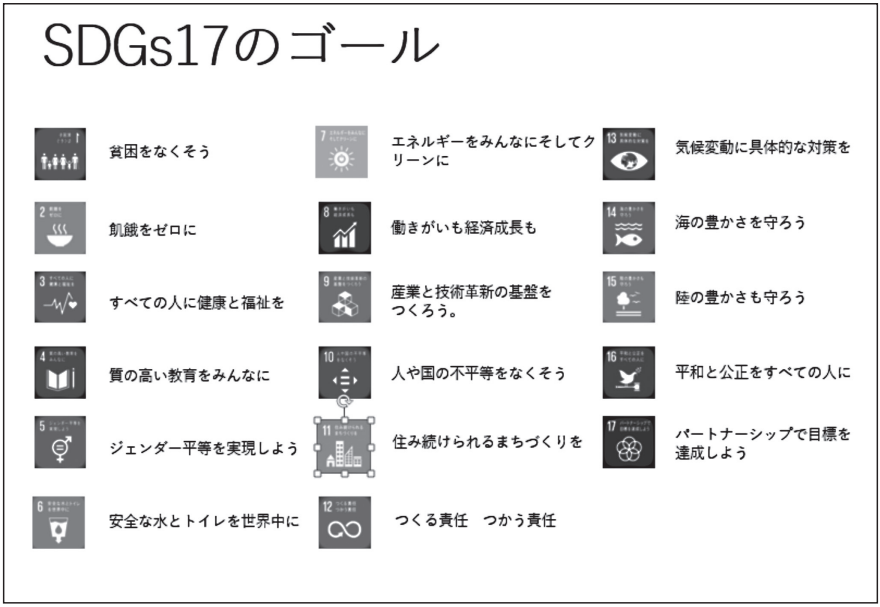
同時に、貧困の問題を考えると、二〇〇〇年から二〇一五年と比べてみると、先進国の国内の格差が広がったことが重要な変化です。日本でも子ども食堂や子どもの貧困ということを耳にするようになりました。誰一人取り残されないためには、国内の格差にも目を向けるのがＳＤＧｓの特徴です。

ＳＤＧｓでは、地球が直面する課題の統合性と不可分性を強調しています。つまり環境の問題も、貧困の問題も、社会の問題も分けて考えてるのではなく、それらはつながっていることを意識して目標に向かって進まないと、ＳＤＧｓは達成しないということです。ＭＤＧｓには環境の問題が重視されていませんでしたが、ＳＤＧｓでは大きく取り上げられています。それだけ地球環境の悪化が急速に進み環境問題の取り組みなくしては、貧困の問題も人権の問題も悪化するからです。

先ほども話したとおり、私たちの行動が世界の持続不可能性を促進しているという意識をもつ事の重要性と、私たちの足元にも同じような格差の問題が広がっていることに目を向けることの大切さをもって、ＳＤＧｓは先進国の取り組みを求めるようになりました。そのために、ＭＤＧｓの時と違って、企業や日蓮宗の皆様をはじめとする宗教者がＳＤＧｓに注目をするようになったのは、「先進国も自分たちの課題として取り組む」ことが求められるようになったのが大きく影響しているからでしょう。

次ページにあるのがＳＤＧｓの十七のゴールで、今日は細かくは説明しません。先ほど不可分性、統合性について触れましたが、これだけさまざまな方面から社会を見ることが求められているのが、ゴールの数の多さからも分かります。以上がＳＤＧｓの概論で、駆け足で進みました。

それでは次に進みたいと思います。「誰一人取り残さない社会」をめざしているとおり、多くの人が取り残されて



いるのが現実です。そこで、私の日頃の活動の中から見えてくる、取り残されている人たちについてのお話をしたいと思います。

まず、コロナ禍では皆様も非常に切実に、多様な問題を突きつけられていらっしゃると察します。昨年アーユスで、「コロナ禍を乗り切るための活動支援」を急遽行いました。アーユスが日頃一緒に活動している団体が、コロナ禍が始まって活動が思うように進めなくなっているだろうという懸念から、寄附も募り、助成活動を始めました。

当初は、NGO自身も資金繰りに困るとか、これまで行ってきた活動の継続に支障を来たして、そこに対する補填を求められるかと考えていましたが、実際は活動地域の人たちの暮らしが追い詰められていて、食料支援への協力申請がとても多くありました。

私たちの活動は国際協力が主軸ですが、国内にいる難民や留学生、移民労働者への支援をしている団体とも協力関係があり、そこからの申請からは、難民や外国人労働者、留学生などが困窮してることが分かりました。

特に難民は就労制限があるために日頃から自由に働くこ

ともできずにいましたが、それまでは例えばイスラムの方であれば、困った時はモスクに行って泊めてもらうとか、入管に行って手続きをする必要がある時に品川まで行くお金がないといえば二千円借してもらうなど、ささやかで、緩やかな支え合いの関係の中で生き延びていたそうです。それが、移動が自粛されてモスクにも行けない。知り合いのところにも行くことができない。決して健康的な生活を送れていないために、動いて新型コロナに感染したら大変なことになるため、家に引きこもらざるを得ない状況も続きました。

留学生も、飲食店でのアルバイトなどで生活をつないできたところ、自粛要請のために仕事がなくなり、生活に困窮したそうです。そのような人たちに対する食料支援が、いろんなところで行われていました。難民や移民の中には、滞在条件によっては定額給付金などの公的扶助の対象外になった方もいました。明日の食事を心配する日が続いたと聞きます。

また、マイノリティーの子どもたちが居場所を失ったことも報告されました。特に外国人の子どもや、ＬＧＢＴＱの子どもたちなどは、日頃、自身の悩みを相談し、仲間を見つけて気の置けない人たちとの会話ができる自助グループのような場所があったのですが、そこに行くことができなくなり、悩みを一人で抱えるようになってしまいました。幾らオンラインが発達しても、特にＬＧＢＴＱの子どもなどは、親が一緒にいる中でオンラインでそういう話をすることもできません。オンライン上でも、暴力や搾取の対象となるなど、課題が浮上したと聞きました。

海外では、ロックダウンが食糧難を引きおこし、各地で食料支援が行われました。途上国といわれる国は、既に医療体制が脆弱であるために、感染が広がる前からロックダウンしていました。そうなると、日雇い労働者が一気に職を失うわけです。国境が封鎖されれば、物資も入ってこない。農民、難民、ストリートチルドレンなど、日頃から社会的に弱い立場にいる人たちが、さらに追い詰められていき、食料を得ることが困難になりました。間違った情報が流れるために、文字を読めない人たちにも正しい知識が伝わるよう、コミュニティラジオの支援を行ったところもあ

りました。

それまで緊急救援を行ったことがない団体が、緊急救援を始めざるを得ないくらい逼迫した状況が生まれたことが、支援事業からもわかった次第です。①の写真は、日本の国内の難民支援で難民に食料を配っているところ、②ではアフリカのＨＩＶ陽性者でシングルマザーの家庭に食料を送る、③はレバノンでのパレスチナ難民に向けた食料支援の食料の一覧ですね。④は、今、注目が集まっているアフガニスタンでも、やはり日雇い労働者の方が多くて、家庭が困窮して食料難に陥り、食糧支援をおこなっている様子です。

以上がアーユスの活動から見えてきたことで、他にもイギリスのＮＧＯオックスファムが、今年の四月九日に出した報告をご紹介します。新型コロナウイルス感染症によって、二〇二〇年の世界中の女性たちの収入の推移を見ると、

①

②

③

④

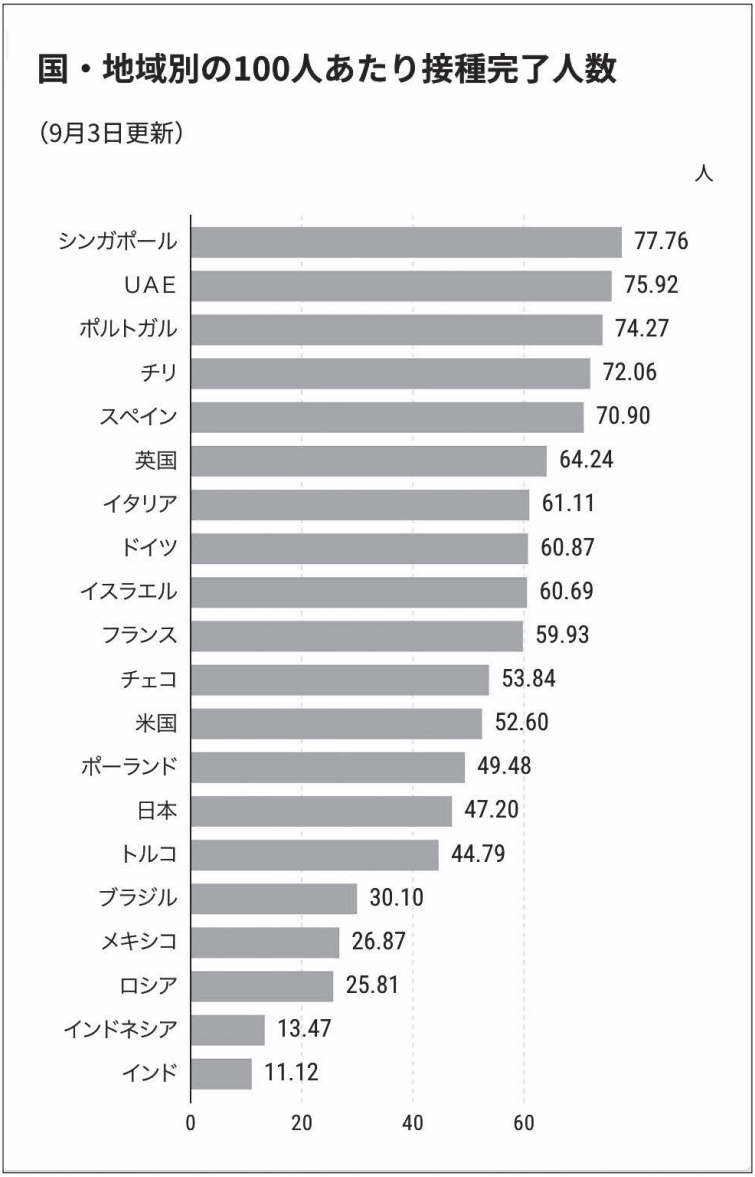
少なく見積もって八千億ドル、約八十八兆円の収入が失われたということです。

八十八兆円というのは、九十八か国のＧＤＰ、国内総生産を合わせた額に等しいぐらいで、その金額自体が非常に大きいものです。それだけ女性がインフォーマルな仕事や不安定な仕事に就いていたために、コロナによる影響が収入面で大きな数字となって表れてきたという報告でした。この報告をみて、支援先の状況が現実だったことを再認識しました。昨年、世界食糧計画という国連機関がノーベル平和賞を取ったのも、去年一年間で食糧難になった人たちが、私たちの想像する以上にいたことの表れでしょう。

引き続きコロナの事例を幾つか挙げます。誰一人取り残さない、という視点から新型コロナのワクチン接種の状況を見ると、高所得の国々では、これまで二人に一人がワクチン接種を完了しています。五十七・三四％。しかし、いわゆる低所得国だと、四十七人に一人しかまだ終わっていません。二・一四％しかワクチン接種が終わっていないということです。

ワクチンの費用は、平均一人当たり三・七ＵＳドルで、国民一人当たりの医療費の支出が平均四十一ドルの低所得国にとっては、負担が大きいことがわかります。先進国にとっては、既に大きな支出の上にワクチンが入っても、「少し増えたかな」程度で終わるかもしれませんが、低所得国にとっては非常に負担が大きい。次ページのグラフは九月三日の状況を示すものです、百人当たり接種完了人数を見ても、ここにアフリカの国々が出てくることはありません。高い接種率はヨーロッパ、中東の国々がほとんどです。たまに南米もありますが、ワクチン接種の不公平さの現実が見えてきます。

それに対してインドと南アフリカというのは、ワクチンの特許を一時停止するよう求めています。薬は、開発されたあと二十年間特許がかかるために、その間はジェネリック薬を作れません。インドや南アフリカは、抗ＨＩＶ薬をはじめとしジェネリック薬の生産をかなり行ってきているので、工場も製薬技術をもっています。ジェネリック薬の



チャートで見るコロナワクチン　世界の接種状況
https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-vaccine-status/

生産が可能になれば、より多くの人たちにより安価にワクチンを支給できるようになりますが、先進国が特許の一時停止に反対しています。今年の春にアメリカがバイデン政権になって「特許の一時停止をする」と宣言しましたが、その後の動きは具体的に伝わってきていません。

確かに薬の開発は、時間も技術も資金も多く必要とします。ただし、今回のワクチンには、かなりの公的資金が既に投資されています。これまでの様々な感染症とは違って、新型コロナは、言ってみれば全世界、途上国も先進国も、国を問わずして影響を与えているために、先進諸国も、国を挙げて多くの公的資金を投資してきています。

二〇二〇年十二月の国境なき医師団の報告によると、モデルナは米国政府から二十五億ドル、ファイザーはビオンテックを通じてドイツ政府から四億四千三百万ドル近い助成金と大手投資銀行から一億一千八百万ドル以上の融資を受けたそうです。世界的に大きくＳＤＧｓの目標が掲げられているにもかかわらず、取り残されてる人たちがたくさんいることが、新型コロナの事例からもあきらかです。

「STAY HOME IS A PRIVILEGE」というのは米国でみられた落書きで、家にいられること自体も特権であるという意味です。エッセンシャル・ワーカーと呼ばれる人たち、仕事の都合上家に居たくても居られない人たちや、そもそも居る家がないとか、家にいると暴力を受ける可能性があるとか、さまざまな理由から家にいることが難しい人たちがいることもコロナ禍で浮き彫りになりました。これは社会的に弱い人たちが多くいることの表れではないでしょうか。

では、最後に「お寺への期待」という話で終わりたいと思います。先ほど、国内の中で、留学生や難民が経済的に逼迫している話を例として挙げましたが、そのような中でも、新しい助け合いの輪が生まれているとも感じています。そこでお寺が力を発揮できることを、私たちも経験をしました。

神戸市に「ＰＨＤ協会」というＮＧＯがあります。アジアから研修生を招いて、農業・保健などの研修事業を日本

国内で行っている団体ですが、コロナ禍になりアジアからの研修生の招聘ができなくなりました。そこで、国内の留学生や外国人技能実習生へシェアハウスでの居住支援や食料提供の支援に力をいれるようになりました。留学生たちや技能実習生たちはコンビニのお弁当を作るなどさまざまな労働力として日本の経済を支えているにもかかわらず、その仕事がなくなって困窮していることが分かったということでした。

昨年の春以来、食料の支援を常に数十人に対して行っているそうです。フードバンクなどから来る支援物資には生ものはなく、生ものが欲しいと思ったら、頂いた寄附などから購入するしかありません。そうなると果物などは高くて手が出ません。それを知ったアーユスの支援者から、お寺さんにはたくさんの果物が上がるので、「分けてもらえることってできないかな」と相談されました。しかし協力したくても、御宝前に上がった生ものをどうやって送るのかという問題も悩ましくて、いろいろ考えたあげく、「近いところであれば、受け取りにいくことも届けることもできるだろう」と近隣のお寺に相談することにしました。

ＰＨＤ協会は神戸市の長田区に事務所を構えています。長田区には長田区仏教会があり、八割方、浄土真宗本願寺派のお寺ということが判明しました。たまたま本願寺派の方から別件の支援事業のことで相談を受けていたので、逆に私の方からこの支援の件を相談したところ、神戸別院が動いてくださり、お檀家さんからお米の寄附を頂き、それを提供してくださったのです。

右の写真で五体投地をしている男性はミャンマーからの留学生で、ちょうどクーデターが起きた後のことで、お寺

に行くことができて心が安らいだのか、着くなり五体投地をしていたということでした。こういうふうにお寺がハブとなって、物を巡らせるようなことができるといいなと実感した次第です。

加えて、こちらが『本願寺新報』の記事です。神戸別院の話を聞いて、「そういう事情なら、うちの田植えの時にアルバイトに来ないか」と、ミャンマー人の留学生が近隣の農家さんのところに手伝いに行った話が記事になっていました。外国人を雇うのはハードルが高く感じるかもしれませんが、そこにNGOとお寺が介在すれば、安心感を伴って、自分たちが持っているものを巡らし支え合うことができるだろうと感じました。アーユスでは日頃から、「物でお布施」という活動をしています。手元にある使いきれない食料品などを送ってもらいバザーで販売して活動費にあてていますが、最近は寄せられたものを、PHD協会や、都内の難民支援をしている他団体、もしくは会員さんが取り組んでいる子ども食堂などに支援物資を巡らすハブとなることにも力を入れています。

最後、アーユスでは去年から「お寺と百年後の未来」という、百年後の持続不可能な社会の中にお寺があるんだろうかということを問いかけながら、百年後を持続可能な社会にしていくために、今、お寺ができることを考えるセミナーをシリーズでおこなっています。去年は二回、環境系の問題を取り上げて開催しました。一回目はお寺が使う電気を、再生可能エネルギーにできるのではないか。作るのではなくて、

第3種郵便物認可　本願寺新報　2021年(令和3年)7月1日　木曜日　8

news　ニュース

農作業で就労支援

兵庫の農業・戸田勲さん（正福寺門徒）　コロナ禍で困窮する外国人留学生を

「コロナ禍で困窮する若者に今私ができることを」と兵庫県三木市の農業・戸田勲さん(63、同市・正福寺門徒)は、ミャンマー人留学生のオカピョーさん(25)にアルバイトで農作業を手伝ってもらい、就労環境を作っている。

兵庫教区仏教壮年会連盟理事長の戸田さんが同連盟のスローガン「できることから始めよう」を行動に移そうとしたのは今年3月。教区実践運動の会議で、コロナ禍でアルバイト収入が減少し学業を断念する留学生の貧困問題があると、教務所職員から聞いたのがきっかけだった。職員と相談し、海外研修生の受け入れを仲介する神戸市の公益財団法人PHD協会を通じて、オカピョーさんの紹介を受けた。

オカピョーさんは土木工学を学ぶため、昨年10月に来日。同じミャンマーからの留学生3人と共同生活をし、働きながら日本語学校に通っていたが、コロナで労働時間が削減されるようになり、やがて突然の届く止めで仕事を失った。オカピョーさんは「ミャンマーは軍事クーデターで、子どもや高齢者など立場の弱い人や多くの人が絶命の危機に陥っている。家族のことも心配で、私の不安を測らすことはできなかった」と胸中を語る。

5月29日、オカピョーさんは初めて戸田さんのもとを訪れ、田植えを手伝った(写真右)。作業着とゴム長靴姿になったオカピョーさんは、ぬかるみの中、軽トラックの前台の荷を田んぼまで何往復も運んで田植機を操作する戸田さん(同下)に渡し、苗箱の洗浄を行った。8時間の労働を終え、戸田さんからアルバイト代とお米や食料品を手渡されたオカピョーさんは「親切丁寧に教えてくださり、戸田さんに感謝している。次回の作業も楽しみ」と満面の笑顔を見せた。

戸田さんは「日本語でのやりとりは十分ではないが、伝えようと一生懸命話してくれるうちにわかり合えるようになった。手際よく働いてくれて大助かりだった。『支援』というほど大したことではなく、小さな経済活動だが、困っている若者をこのような形で応援することもできるのだとわかった。全国のご門徒さんにも応援の輪が広まれば」と話している。

オカピョーさん(左)と戸田さん

使う電気を変えていこうと呼びかけました。二回目は、塔婆を地元材に変えてみようというものです。塔婆を地元材にしようと進めていらっしゃるのは日蓮宗の方々なので、ぜひ詳しい話は、皆様の方でお話を聞く機会を持っていただければ嬉しいです。

一度、青梅の山に日蓮宗の方をはじめ、セミナーに参加した方と一緒に行き、本当に地元の山が荒れていることを実感しました。青梅の山は斜面ごとに持ち主が違うそうですが、この写真も、右側と左側では持ち主が違います。左側は持ち主が手入れをしているため、日の光が入って下草も生えて、災害にも強い山になっていますが、右側の持ち主は手入れしていないため、土がむき出しになって、雨が大量に降れば土砂が流れ出すことがよく分かります。

山の手入れを続けていくためには、木が育ち、その木を使い、そしてまた植えるという循環が必要です。地元の木を使うことは、地元の産業を復興させることにもなれば、環境のためにもなるし、いろんなことが学べることが分かりました。

その時に冗談半分で言っていたのは、日蓮宗さんも教団で山を一つ買って、そこにみんなで木を植えて育てたら、例えば、都内のお寺さんが本堂や庫裏などを建て替えるときに、そこの木を使えるといった仕組みができていいんじゃないのというこ

とでした。塔婆の需要はこれから下がるだろうから、塔婆の木を地元材に変えることだけでは山の復興に大きく影響を与えないかもしれないけれど、お寺さんや檀家さんの環境への意識を高める上での良い素材になるから続けていきたい。でも、本当に地域に貢献することを考えたら、教団で山ひとつ管理するくらい大きなことをすると、大きな影響を生み出す可能性があり、コロナ禍によってなおさら閉塞感が高まる社会をブレークスルーするのではと、山でお坊さんと話しながら感じました。

冒頭のお話は地球規模のスケールで大きな話だったかもしれませんが、お寺の中でのＳＤＧｓの活動は、日常使っているものを見直していく、さきほど申し上げたエネルギーや塔婆を見直す、ペットボトルの使用をやめてみるなど、いろいろな働きかけができると思います。具体的に動かなくても、お寺がハブになって、ＮＧＯや支援団体、行政などをつないでいくこともできると思います。

一方で、新しいことに取り組もうとすると、対立も起きます。塔婆一つ取っても、従来の塔婆屋さんはどうするんだとか、出入りの業者さんがいるのに新しい店は使えないとか、新しい取り組みには、それに相対する意見や人たちは必ず出てくると言っていいでしょう。ＳＤＧｓで再生可能エネルギーを生み出そうと風力発電所が地元住民の了解を得ずに建設された場合、環境や住民の意向がないがしろにされたままでもいいのでしょうか。そういう場合の話し合いや、誰のための事業なのか根本的なところの議論を進めるのに、宗教者という立場は、生かせるのではないかと私は期待しています。

たとえば対話がしっかりとされないと、多様な人たちが自分自身の存在、自分の意見を伝えることもできないし、理解してもらうことも理解することもできません。そういう時に、ぜひ女性をはじめとする取り残されがちな人たちに目を配り、彼ら彼女たちも対等に発言の機会が得られる場ができることにも、宗教者の働きかけがあることを期待します。

実際に対立があった場合に、誰の立場に立つのか。これも非常に難しい問題です。ＮＧＯの立場で考えると、取り残されている人たちの側に立ちます。強い人たちは、私たちが支えなくても発言できるかもしれない。自分の権力を使うことはできるかもしれない。でも、取り残されている人たちは、対話できる場にたつことすら難しい。それには外部の支えが必要です。そういうところに目を配ることも、お寺に期待するところです。

では、これでお話は終わりしたいと思います。アーユスの活動、よろしければ、ぜひ注目していただければうれしく存じます。どうもありがとうございました。最後、駆け足になり、失礼いたしました。

司会　枝木先生、どうもありがとうございました。私もＳＤＧｓについて、細かいところ分かってなかったということを、今、お聞きして理解できたように思います。大変貴重なご講演をいただいたと思っております。少し時間がございますので、質疑応答をさせていただきたいと思います。声を出していただいて、質問のある方、手を挙げていただきたいと思いますが、いかがでございましょうか。

一つ思ったのは、ＳＤＧｓということが資本主義社会というものを背景としているということで、何となくそういう人たちの思惑もあるんじゃないかというイメージを持っている方も結構いらっしゃったのですが、今日聞いていて、そうではないんだなということが理解できたのですが、その辺のギャップみたいなものを感じられたことはございますか。

枝木　あります。最後、スライドを飛ばしてしまいましたが、経済発展という目標もあります。ＳＤＧｓが経済発展が主流となっている資本主義の中で目指される限りは、たとえばそこで幾ら再生可能エネルギーと言っても、資本主義の流れが変わらない限りは、資源を使い尽くすだけです。構造的には大手電力がしてきていることと変わりがなく、

地球が十個必要になっても足りないという可能性もでてくるでしょう。先日、熱海で起きた土砂崩れも太陽光パネルの乱立が原因でしたが、無秩序に再生可能エネルギーを作ろうとするのは、環境にも地域社会にも悪影響を及ぼす例はいたるところで見られています。ＳＤＧｓの軸をどこに置くかというのは、実践の場ですごく問われていると感じています。

司会　分かりました。ありがとうございます。

質問者①　大変に興味深く聞かせていただきました。ＳＤＧｓの問題って、かなり複合的にいろいろと絡み合ってると思うんですけれども、枝木先生の立場からごらんになって、一番根源の問題はどこにあるとお考えでいらっしゃいますでしょうか。

枝木　根源ですか。

質問者①　はい。一番大元になっていて、「これが、とにかく現在、最優先されるべきではないか」っていうものなんですけど。

枝木　難しいご質問ですね。個人レベルを考えた場合と、世界規模での場合では違う答えが出てくると思います。それを前提にですが、「右を取れば左がだめになる」みたいなところが必ず出てきますよね。再生可能エネルギーを生産する裏側には、その被害に遭っている人がいる可能性もあるために、気候危機が厳しいから再生可能エネルギーを

増産しようと言い切ることの難しさを感じています。そういう中で個人レベルでは、自分の暮らしが当たり前ではないことを何かの折に考えることが大切だと思います。当たり前の日常は、とても細やかなものかもしれません。しかし誰かがその裏で犠牲になっているかもしれません。少し自分の生活を当たり前と思わず、その当たり前を可能にしてくれている人たちへの想像力を持つことが大切だと思います。

それから、最近思うのは話し合いを重ねることの大切さです。仕事でも、多様な意見を聞き議論すると、時間がかかり前に進まなくなります。一部の人たちだけで決めたくなります。押せ押せで前へ進んでいくことによって経済を発展させ、お金をもうけ、前のめりになりがちな自分に気づくことも多々あります。誰しもがそうなりがちな社会だからこそ、人と話をすることでスローダウンさせていくことができるかしれません。少しスピードを落とすと、見えてなかった豊かさが見えることもあるだろうと感じています。お答えになってますでしょうか。

質問者①　ありがとうございます。すごくよく分かります。今、私たちの発想の基には、進歩の思想とでも言うんでしょうけれども、「向上してかなければいけない」みたいなものが暗黙の前提として染みついてるような気がしますので、そこのところをまずしっかりと認識するっていうのが第一歩になるのかなというふうに、今のお話を聞いていて思いましたので。

枝木　きれいにまとめていただいて、ありがとうございます。

質問者①　ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。他に何か、もう少しお時間ありますので受けたいと思いますが、どなたかございますか。多分、ＳＤＧｓという言葉についてのイメージとか理解度っていうのも、今日の参加者、私も含めてなんですけど、バラバラだと思うので、今日初めてＳＤＧｓの基本設計から聞かせていただいたので。

質問者②　ＳＤＧｓっていうのは、特に環境なんかだと歴史が長い。昔から、ストックホルムだ、地球サミットだって形で二十年、三十年という歴史の中で、それが更に発展してきているのかなというふうに、ある程度ＥＳＧ（環境・社会・ガバナンス）との兼ね合いで思ったりするんですけれども、そういう流れの中で、現状ではまだ国連決議という形ですから、言い方がいいかどうか分かんないですけど、努力目標みたいなところは、まだあると思うんですよ。

枝木　そうですね。

質問者②　つまり、拘束力がないと。

枝木　ないです。

質問者②　というところはあると思うんですけど、歴史の流れの中で、将来的に、例えば強制力を持った条約というような形で、強制力を持って各国に行くと。例えばジェンダーとかっていうものを、迫害されている人々を、ＳＤＧｓの流れで「強制力があるから守りなさい」っていう形の方に流れていく。そういう方向性にあるとお考えでしょう

か。

枝木　私の感覚で言うと、その流れが生まれていくのは難しいと思います。

質問者②　難しい。

枝木　はい。今回発表するに当たり、岩波書店が出している『ＳＤＧｓ』を参考にしました。二人の著者のうちのひとりの南さんは、実際に国連でのＳＤＧｓの策定に関わった方です。その人が赤裸々に、どういう国がどういうふうに関わったのかと書いていて、非常に面白かったです。ＳＤＧｓはそもそも、ある程度は妥協の産物ではあります。各国の思惑に沿わない部分がある中、どう妥協点を見つけていくのかは、大きな課題だったのではないでしょうか。どこかで戦争がおきても、常任理事国の反対を得られることもほぼありません。全世界的なレベルで合意を得ることは、かなり難しいことだと思います。

ＳＤＧｓの中に平和の目標を入れるべきかどうかについても、議論になったそうです。平和というのは安全保障の課題であって、開発の目標ではないだろうというのを、幾つかの力を持ってる国が言ったということでした。ＳＤＧｓのいいところは、議論と決定の場に途上国も参加していることです。その中で、東ティモールというインドネシアの横にある小さな国が、「平和というものなくして国の発展はない」ということを主張して、平和に関する目標が入ることになりました。インドネシア内で長い間迫害を受け続け、大虐殺などを経験して、ようやく二〇〇二年に独立した国です。彼らは、平和な社会が発展の基盤だと身を持って経験しているからこそ、平和の目標の重要性を主張できたのでしょう。

質問者②　なるほど。むしろ国際社会が強制的に「こうしなさい」っていうよりは、一人一人の運動を活発化させることで、結果的に実現に一歩でも近づけていくという、そういう視点の方が重要だということでしょうか。

枝木　そのように、私は思います。特に市民などの動きで企業や政府を動かす可能性は大きく残されています。特に今、企業に関しては、環境・社会・ガバナンスを配慮した企業活動に投資をしようという、ＥＳＧ投資が世界的に進んでいます。ＥＳＧ投資の視点で市民が動くと、もしかすればワクチンの特許の解除なども可能になるかもしれません。一人一人の動きは、とても大切だと思います。

質問者②　はい、分かりました。ありがとうございます。

司会　まだいろいろ興味の尽きないところなんですが、お時間となりましたので、ここで枝木先生のご講演を終わらせていただきたいと思います。また何かの機会があれば、いろいろお話をお聞きしたいと思います。枝木先生、どうも本日は、ありがとうございました。

枝木　どうもありがとうございました。よろしくお願いします。

司会　よろしくお願いします。